慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本中世史の研究(原勝郎著, 同文館發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.155- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

こゞを指摘した點など、彼の獨創觀（オリジナリテー）のひらめきが隨處に見はれて居るけれど、茲に一々それ等を引用することは出來ない。

アリソン・フイリップ夫人の譯筆は、その良人の援助（序文に斷つてある）の所爲もあらうが、流暢で克く生彩に富んだ原文の長所を描き出して居る。

私は本書を以て、フランス大革命を取扱つた最もアップ・ツー・デートの述作であると推奬するに些かも躊躇しない者である。（占部百太郎）

日本中世史の研究（原勝郎著 同文館發行）

故原勝郎博士の遺稿第一卷として先に「世界大戰史」が出版されたが、今回此につぐものとして、西田直二郎博士中村直勝學士等に依つて本書が世に出づるに至つた。原博士は京都帝國大學に於て西洋近世史を多年講ぜられてゐたが、日本史に關しても又造詣深く卓越せる論文を早くより發表されてゐた。特に一九二〇年に出版された An Introduction to the History of Japan は名著として知られ、一九二六年 Histoire du Japon として佛譯されてゐる位である。

今回編纂されたる本書は第一編を日本中世史となし、嘗て出版された日本中世史第一卷及びその續編を載せ、第二編日本中世史論考は著者が藝文、史學雜誌、史學研究會講演集、國華、史林等の諸雜誌に發表された諸論文中日本中世に關するもの二十種を集めたもので、これは本書の大部分を占め、附錄第一には歷史の研究及び隨筆、附錄第二には日本史の概論及び書紀紀年考等を載せてゐる。

日本中世史第一卷の名著たることは既に一般に認めらるゝ所であつて、此處に贅言を要しないが、その豐富なる史料を自由に使用し、之を基礎として鋭利なる論述を進めらるゝ所や、その文章の流麗であり、その論述の正鵠なる點など今更ながら驚くべきものであり敬服すべきものである。本書は嘗て明治三十九年日本中世史第一卷（鎌倉前紀武家勃興時代）として富山房より出版されたものであつて、博士の序文に依れば、三十六年の秋に稿を起されたが、中途日露戰爭起り、博士自ら干戈を執つて戰場に出でられた爲めに戰爭終了後始めて出版せられたものであると言ふ。博士は本書に於て武士階級の發生とその發達を取り扱はれ、先づ初めに平安時代の文化が非常に不健全のものであつたことを各方面より論じ、かゝる外冠玉にして內敗絮たる文物は必や早晚其假面を脫するの時至ると言ひ、藤原時代の貴族生活を詳細に檢討してその內に存する矛盾を指摘し、貴族の勢力の沒落武士階級の發生の何に依て起つたかを述べ、中央と地方との懸隔の大なることを說いて東國地方に於ける武士階級の成立を述べ、保元平治の亂を經て遂に武士が、政權を掌握し鎌倉に幕府を開設するに至るまでの事情を說いてゐる。要するに本書に於て博士は、從來暗黑時代としてあまり顧られなかつた中世時代は、實は「本邦文明の發達をして其健全なる發起點に歸著せしめたる點に於て、皮相的文明を打破して之を摯實なる經路によらしめたる點に於て、日本人が獨立の

國民たるを自覺せる點に於て本邦史上の一大進歩を現した時代」(序文)であることを明にせられてゐるものである。續編は最初に出版された日本中世史第一卷の卷末にその豫告まで載せてあつたが、遂にその發表を見なかつた稿本であつて、本書に於ては、初めに鎌倉幕府草創當時の東國武人の狀況を述べ、更に武人間の新舊主義の衝突を詳述し、之が重要なる一原因をなして承久の亂が起り、此の亂に依て武家主義が確立し、皇室以外に對する忠君の觀念の公認さるゝに至つた事情を說き、又封建制度に就て記してゐる。これはかつて豫告された日本中世史第二卷の論述事項と大體その內容を同じくする樣である。日本中世史第一卷は出版後多年を經て現存に於ては之を手に入れることは仲々困難であつたが、今回この日本中世史の研究の中にその續編と共に載せられたことは誠に喜ぶべき事である。

第二編に於ける諸論文の中「東西の宗教改革」「法然上人と聖フランシス」の二編は、博士がその專門の立場より日本と西洋の比較をなしたもので共に注意すべきものである。「鎌倉時代を三期に分たば」「足利時代を論ず」「東山時代に於ける一縉紳の生活」「三河物語の武士道」等の諸論文は史料を自由に使用して社會全般より之を論述したものであつて博士が時代の全局を見ることの巧であつたことを示すものである。又考證的論文としては「吾妻鏡の性質及其史料としての價値」「足利時代に於ける堺港」等のものがある。其他「文藝史上の鎌倉時代」「鎌倉時代に於ける人文の地方的傳播」「鎌倉時代の布教と當時の交通」「鎌倉時代に於ける布教の徑路」「足利時代と肖像畫」「都鄙の文藝」「世の替はり目と京都」「服忌制の變遷を論じ德川初期の道德史に及ぶ」等の諸論文は何れも風俗文藝政治宗教等の文化現象を時代的全般的觀察の下に論述したものである。附錄には博士の史學に就ての見解を述べた「歷史研究に就て」「歷史の功過」「歷史の効用」「歷史上戰爭の影響」等の諸論文及び「日本文化の過程」「日本史稿」「日本歷史講義」「日本書紀々年考」等多くの未定稿本を載せてゐるのである。

以上は本書の極めて大略の內容を述べたに過ぎないが上述の外に更に四五の隨筆が載せられてゐる。例へば「さま〳〵の秋」「新嘉坡より」等であつて此等を一讀すれば博士が又文章の人であつたことを知り得るのである。最近盛になつた經濟的又は社會的方面の研究を博士が重視せず比較的此等を閑却してゐる點や、博士の歷史に就ての見解に矛盾の存する點などがあるとしても、此等は本書に依て我々の敎へらるゝ所より見れば少しも本書の價値を傷けるものとは思はれないのである。兎に角博士の日本中世史に關する全論文集の出版された事は學界を益する所が甚だ大であると思ふ。(今宮新)

日本史の研究第二輯 (三浦周行著 岩波書店發行)

本書はさきに公にせられた「日本史の研究」の續編として發表せられたものである。

前編所收の論文の範圍は、大正十一年一月迄の業績に止るが本編には主として其以後の既發表及び未發表の日本史に關する諸論